若者

アメリカ旅行の思い出

松田義輝*

早いもので，アメリカ旅行から帰って2カ月になる．見るもの聞くもの全てが私に新鮮な印象を与え，また勉強でもあった夢のような3週間を，スナップ写真や持ち帰ったパンフレットを見るたびに，昨日の如く思い出す毎日である．私が旅行することになったのは，共著論文がアメリカの National Tele-Communications Conference において採用され，研究室の先輩である山下正光氏が研究発表のために同研究室の村田正氏と渡米されることになり，私にとっても外国の学会を見る良い機会であり，また学生時代最後の思い出に海外旅行をと考えていたため両先輩に同行することにしたのであった．学会は，11月30日から12月1日までテキサス州ダラスで開催され，その前後3週間シカゴおよびニューヨークの大学訪問も含めて，西海岸から東海岸までアメリカの主要都市を周遊するまさに駆け足の旅行であった．

アメリカの自然は予想以上に雄大であった．四季の変化に応じて，微妙に変化する自然の美しさでは，日本に優る国はないであろう．しかし，人間の感受性を超越して人間を驚喜させる雄大な自然は日本に存在しない．ラスベガスからグランドキャニオンへ向う約1時間の空からの眺め，人間の力など一切受け付けない見渡す限りの赤茶けた砂漠の世界，数万年の地球の断層を誇示するグランドキャニオンの大峡谷，その中で，人間の自然への挑戦を表わすかのように存在するフーバーダムと紺碧の人造湖ミード湖は，まさに私を驚喜させるものであった．アメリカが日本の二十数倍の面積を有する広大な国であることは周知のことである．しかし，それは日本で想像する規模の自然が二十数倍の領域に広がっているのではなく，二十数倍の規模の自然が存在するということなのである．

自然の雄大さに魅かれるのであろうか．西海岸では，一目でそれとわかる日本人をよく見かける．ラスベガスからチャーターしたグランドキャニオン周遊の小型飛行機では，半数にあたる6人が日本人であった．ベトナム戦争で戦闘機乗りであったというパイロットの威勢のいい案内の後，日本語での案内が流されたのには驚くというよりも呆れてしまった．これだけ日本の観光客が多いということは，やはり，日本の豊かさを象徴しているのであろう．

カリフォルニアを後にして東へ飛び，私達がシカゴに着いたのは，日本を出て1週間目アメリカの生活ルールを覚え，言葉にもようやく慣れた頃であった．

イリノイ大学のアーバナ学舎は，シカゴより飛行機で南へ1時間，周囲に小高い丘一つ見えない大平原の農業地帯にあり，路線航空機の発着する空港を有する広大なキャンパス内にある．大学のある人口数万のアーバナ・シャンペーンの町全体が，キャンパスという印象を与える．私達は，空港から大学のリムジンに乗り，Coordinate Sience Laboratory のハンチンガー助教授，前田渡教授を尋ね，その研究室を案内してもらった．私と同世代にあたる Ph. D コースの学生が表面弾性波に関する彼の研究を説明してくれたのであるが，私達の少しでも理解しえない様子に気付くと，納得するまで繰り返し丁寧に説明する彼の態度は，まさに彼の研究に打ち込む情熱的な姿を感じさせるものであった．また，同研究室では工業用ロボットの自動制御に関する研究も行なっていたが，その充実した実験設備には目を見張らざるをえなかった．これは，社会の要請を受け，それに伴った経済的援助を受け入れる形で，より現実的な実

*松田義輝（Yoshiteru MATSUDA），大阪大学，大学院，工学研究科，通信専攻，博士課程前期2年
滑川研究室

践的なレベルの研究を行なっているため可能となるのであろう．私達を案内してくれた Ph.D コースの学生に聞くと，大学に留まって研究を続けるのは難しいという．現在の日本では，博士浪人という言葉が流行するように，大学での研究成果が社会で十分に評価されない現状があり，また，終身雇用制を基本とするため会社間を，あるいは，大学と会社間を自由に移っていくことは難しい．しかし，実力主義および契約制を基本とするアメリカでは，実力のある者は容易に目的にかなった職場に移ってゆき，例え大学教授といえども契約に基ずく義務を果すことができなければ解雇される．この意味で，彼は大学に残るのが難しいと言ったのであろう．

次に私達の訪れたニューヨーク市立大学は，イリノイ大学とは対照的に大都会の雑踏の中で，古い建築と近代的な建築の調和した伝統的な重みを呈する大学である．私達は，通信方式の権威であるシリング教授をその研究室に尋ねた．ここでも，Ph.D コースの学生が彼の研究テーマであるデルタ変調方式による音声・画像の帯域圧縮について説明してくれたのであるが，よく聞くと私達に実験を見せるために徹夜で装置を作ったという，彼のこの熱意に私達はただ感激するだけであった．私は，ここでも豊富な実験設備を十二分に使って精力的に勉強する学生の姿に，日本の大学構造とは異なった新鮮さを感じざるをえなかった．

1976年は，アメリカ建国200年目にあたり各地で催しが行なわれたということである．日本では，建国何年目などとはあまり考えず，昔から我々の土地があり，我々が住んでいたと考える．それは，自分達の土地，自由を自分達の血と汗で勝ち取ったという歴史がないからであろう．しかし，アメリカは周知のように，西欧の移住民が開拓し原住民との闘いの中で築いた国である．この意味で200年祭はアメリカの白人のための祭りであり，他の黒人，東洋人，インディアンには何の意味もないものである．人種の坩堝といえるアメリカでは，事実，私達が街角を歩いていても誰一人注目する者はいないのであるが，政治的な差別はなかったとしても，歴史的に継承された観念上，経済上の差別は依然として存在するようだ．グランドキャニオンの峡谷の狭い平地にインディアンの居住区があり，これを私達は空から見ることができたのであるが，また，サンフランシスコの観光名所として知られるチャイナタウンも，広い大陸に進出できずに閉鎖的な社会を形成した結果であろう．また，黒人居住区域では犯罪の発生率が多い，あるいは，黒人が住むと値段が下がるので黒人を締め出すアパートがあるということを耳にした．このように人種の混在による社会的矛盾を内に秘めた広大な自然の中で生きていくためには，物事にこだわらない楽天的な荒削りな性格と，自己の在存を強く主張する独立独歩の精神が育つのも当然であろう．アメリカ人には日本人的な繊細な性格はあまりみられないようだ．

日本の都市が地方の伝統，自然を反映して個性豊かであるのに対し，アメリカの都市はどこも同じに見える．私達が学会に参加するため訪れたダラスも，ケネディ最期の地という点を除いて何ら特色のない都市である．学会は，ダウンタウンにある一つのホテルを3日間借り切り Tele-Communication の全ての分野にわたり，全体を52の分会に分けて研究発表，講演および討論会が行なわれた．アメリカ国内の学会ではあるが，外国からの参加も多く，日本からも6件の論文発表があり，国際色豊かであった．残念ながら語学の未熟さ故に，各スピーチの内容を完全には理解できなかったのであるが，日本の学会には少ないカクテルパーティや晩餐会などお祭り的な雰囲気は物珍らしく，また，世界的に著名な学者と同じ学会に参加しているという興奮は押えることのできないものであった．

学会が終ると私達は急ぎ帰国の途についたのであった．今回の旅行を振り返ってみて，お世話になった滞米中の日本の方々の活躍ぶりを直接目にし，狭い日本に留まるのではなく広く国際的な活動を行なうことの魅力と，その重要性を再認識する良い機会であったと思う．

まとまりのない文章になったところもあるようであるが，それは，私の感激の大きさをそのまま表わしていると思う．